

特集：アセアン横断型グローバル課題挑戦的教育(TAG)プログラム

TAGパイロットプログラムに参加して —3/12-13の旅行記—

瀬戸 健介（筑波大学 生命環境科学研究科 博士前期課程2年）

我々出川研究室（菅平菌学研究室）一行と有志の生物学類1年生3人は、TAGパイロットプログラムで、3月12~18日の約1週間マレーシアに滞在してきました。ここでは、12、13日のクアラルンプール滞在のことに報告します。

マレーシア到着

成田にて飛行機に乗り込んで待つこと約6時間半、マレーシアの空の玄関口であるクアラルンプール国際空港に到着。空港の外に出て最初に感じたことは、「暑い」ということはさて置き、やけに空が淀んでいる、ということ。太陽を直視できるくらいだから相当である。気になるこのスモッグ？の理由は後ほど。



クアラルンプール市内から見上げた空（お昼どき）
（矢印の先に太陽）

屋台街通り「ジャラン・アロー」で夕食

クアラルンプール空港到着時刻は17:05、そこからタクシーで移動し（目的地を間違えられるという事件を経つつも）、ホテルに到着。すでに夕食時であった。そこで向かったのが「ジャラン・アロー」と呼ばれる屋台街通り。日本の夏祭りのような雰囲気だ。20、21時くらいという遅い時間にも関わらず、非常に賑やかな様子であった。聞いた話によると、日中は暑いため、涼しくなった夕方から徐々に、そして夜遅くまで賑わうそうだ。熱帯ならではの文化なのかもしれない。夕食は、東南アジアらしくカレー…ではなく、中華系の料理。マレーシアは、多民族国家で、かつ華人系が四分の一ほどを占める国。中華料理の屋台がたくさんあったのだ。



ジャラン・アロー（左）とこの日の夕食（右）

マレーシア工科大学（UTM）訪問

翌日（13日）は、UTMのキャンパス内にある「筑波大学マレーシア・クアラルンプールオフィス」を訪問した。現地で教鞭をとられる先生方から、国際交流のこと、UTMでの研究のことなど、様々な話を聞かせていただいた。その話の中で、先ほどの「淀んでいる空」の原因が半明した。マレーシアでは、アブラヤシのプランテーションが盛んで、世界の生産量の半分前後を占めるそうだ。果実から大量の油脂が得られるのだが、その絞りかすはほとんどが燃やされているようだ。その結果が淀んだ空、というわけだ。また同時に、現状燃やすのみとなっている絞りかすを、例えばバイオエタノールとすることはできないかと、微生物の利用の可能性を探る研究が行われているという話も聞いた。菌類の多様性を研究する身として、関われる分野なのかな、と感じた。

果実の王様「ドリアン」

実は、クアラルンプール滞在の最後を飾ったものは何ならぬ「ドリアン」である。どういうわけか、「せっかくだからドリアンを食べよう」という流れが生じた。熱帯といえば多種多様なフルーツというイメージがないでもないし、ジャラン・アローの屋台で見たこともないようなフルーツが並んでいるのを見た。そこをあえてドリアンである。ドリアンは、何よりもその強烈な匂いで有名だ。それはもう強烈であった。ちなみに味は、一部の人は喜んで食べていたが、個人的には「拒絶」の2文字だ。誤解なきように言うとドリアンが強烈なだけで、他の多種多様なフルーツはまともかつ美味しいはずである。しかもお値段は安い方。日本ではお高いフルーツを手軽に食べることができるため、その点は魅力的だ。



果物売り場（上2枚）とドリアン（下2枚）